## 円山にて

日野間　彰

お昼のお弁当がおいしかった。

とにかく寒い日であった。朝方には雨が降り、こんな天気で本当に観察会ができるのであろうかと思われるような日であったが、集会場所へ行ってみると、原先生をはじめたくさんの会員がすでに集まっていた。男性の数が少なかったのが印象的であった。

円山公園を経て大師堂、登山口へ向う。記憶をたどってみてもアサダ、ヒノキ、ブナ、ウリノキ、ウワバミソウ程度しか覚えていない。寒かったので、メモすらしなかったという横着のたまものである。

登山口から山登りを始めたが、足元が濡れていたので、すべってころばないようにと注意することだけを考えていたので、山頂までほとんど何も覚えていない。ただ、山頂にハンノキがあって、変なところにあるもんだなとH君（通称カラス）と話した記憶がある。山頂に着いた頃には天気も良く、 野幌の森が黒く広がってみえた。 一休みして八十八ケ所のお地蔵様の道を下った。途中より天候が悪くなり、腹もすいてきた。ああ、うちにいて暖い部屋の中で、やさしい妻とかわいい子供にかこまれておいしいものでも食べていたらと思ったことか思わなかったことか。公園におりた頃には雨と氷が降っていた。

引卒の昭和生まれのK．K嬢の案内で昼食予定地のレストランへ向かうが、まだ着かない。歩けども歩けどもまだ着かない。そしてやっと着いた。

まわりの人はいろいろと注文して食べていたようであるが、私は朝から胸にしたためて体温で暖く保たれていたお弁当を広ける。

おいしかった。お昼のお弁当がおいしかった。

シナノキ

## 猫柳と私

國兼治徳

今年も猫柳を採りに、妻と簾舞の人里離れた山あいの辺りをうろついた。正月前の我が家の年中行事の一つである。

北区の屯田に住んでいた頃、今は運動公園になってしまった辺りは、一面の柳原で、枝振りのよい猫柳がいくらもあった。荒雪をこいで妻と抱えきれないほど採り、家の中の暖い所において芽を膨らませ、適当に分けてお世話になった方々に配って歩いた。菜の花かスイセンでも添えて生けると風情があり、お正月の生花になると異口同音に喜ばれている。

猫柳とは言っても私どもが集めて来るのは種々雑多なヤナギが一緒くたになっており、正真正銘のネコヤナギよりは、エゾノバッコヤナギなどが多く、むしろ枝振りを重視しているため、植物学上のことは余り頓着していない。もっとも、ヤナギの仲間は種類が多く、ヤナギ博士と言われている東北大名誉教授木村有香氏によると、日本には約50種、雑種も加えると150種程にもなるそうであるから、到底私の手におえる代物ではない。

そもそも、私が猫柳を採り始めたのは中学時代からである。私が中学２年の冬に、それまで祖母と一緒に住んでいた兄が結核で亡くなり、今度は私が兄に代って祖母の許で暮すようになった。祖母の家は空知川に近い田園の中にあり、私はこの家で生れてまもなく母に死別し、もともと祖母に育てられたのだから、祖母の家に行くことは我が家に戻った 意識であり、父の家にない安らぎをおぼえたものである。祖母は狂信と言われるほどの浄土真宗の信者で、念佛三昧の日々であった。中学生であった私はそんな祖母に反発を感じながらも、祖母の何とも言いようのない温かさに甘えて過した。

私は祖母の許に来てから空知川へよく出かけた。せせらぎの聞える川原は心をいやすのに恰好の場であった。時には水切りをしたり、放歌高吟をして気持ちを切り替えるのには最も適した場所であった。

たまたま３月の堅雪の頃だったと思う。猫柳の膨らんだ芽の列に、陽光が当って燦然と輝いているのに眼をみはり、数枝折って持ち帰った。その

時の祖母の喜びようはなかった。まるで、自分が帰依している佛にでも会ったかの如くであった。時期的に佛花に事欠く頃だったから余計喜んだのだと思う。私はその時の祖母の顔が忘れられず、一緒に生活していた間は毎年のように猫柳を採りに出かけた。

大学を出て十勝の高校に勤めるようになり、いつしか猫柳採りも遠のいたが、札幌へ転勤して北区の郊外に住むようになって、再び始まった。しかし、祖母はすでに亡くなっている。それでも猫柳を採り続ける私は、あるいは祖母の喜びの顔をさがし求めているのかも知れない。

## 百人一首の植物(1)

松　木　禄　志

「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじなもゆる思ひを」

藤原実方の作。自作歌を藤原行成がけなしたのを怒り殿中で相手の冠を叩き落した為に陸奥守に左遷されて死んだ。才気煥発の作歌人で刺撰集にも64首ある。この歌は縁語の多いもので「いふ→いぶきを→さしも草→燃ゆる思→ひ（火）とつながる。つまり「私のこんなに燃ゆる恋心を知らないのですか」という意味で、後世芭蕉も奥の細道で多感なこの詩人の薄命の死をはかなんでいる。サシモグサは差艾と書きヨモギの古名である。古来から薬用植物でお灸の原料。

「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」

紀友則とは、貫之のいとこで36歌仙の一人。刺撰集に6千首あり、古今集撰者の一人だった。ただ花とあるだけだが、やはりヤマザクラを見ての作。

サルメンエビネ

オオハナウド